

S. Ashina

後期：現代聖書学の諸問題

オリエンテーション	10/5
1. 創造論	10/12
2. 一神教	10/19
3. 契約思想	10/26
4. 神殿神学・知恵文学	11/2
5. 預言	11/9
6. 研究発表：侯	11/16
7. 研究発表：張	11/30
8. 研究発表：齋藤 or 南	12/7
9. 研究発表：齋藤 or 南	12/14
10. 研究発表：金、岡田	12/21
(11. 研究発表：山下	1/4)
12. 終末論・史的イエス	1/11
13. イエスの譬え	1/18
14. 初期キリスト教と女性	1/25
15. パウロと政治神学 → 火曜日の「聖書演習」へ	

<前回>導入：前期から後期へ——近代世界と近代聖書学**(1) 近代聖書学の成立**

1. 近代世界と宗教の私事化
2. 近代的知：歴史主義と自然主義
3. 近代聖書学
 - 19世紀以降、キリスト教思想には、近代的知への適応という傾向
自由主義神学、宗教史学派
4. 近代聖書学の方法論—歴史的批判的方法—

(2) 近代聖書学の帰結

5. 近代聖書学は、19世紀以降のキリスト教思想全般に大きな影響を及ぼすことになる。
7. 以上の19世紀の動向（啓蒙主義的近代）に対する諸批判
8. 歴史学的なイエス研究の限界、シュヴァイツァーからブルトマン

(3) イエス研究の現在

9. 近代聖書学の動向から。20世紀の聖書学のパラダイム（研究者のコンセンサス）である、「イエスの神の国＝黙示的終末論」という図式の解体。「知恵の教師イエス」論。
10. 知恵の教師イエス
11. 知恵から終末論を再解釈する

1. 創造論**(1) 古代オリエント宗教史の文脈**

1. 宇宙論的タイプの宗教 → 聖書の世界の背後にある古代オリエントの宗教世界。
星神信仰、占星術
2. 古代オリエント宗教史の文脈における古代イスラエル宗教
先行する宗教的伝統、同時代の宗教状況→宗教史学派（19世紀から20世紀初頭）

比較神話学

3. 創造神話の系譜

古代メソポタミア神話（起源神話）

『エヌマ・エリシュ』：ドラゴン退治（水・混沌）と英雄神（太陽・秩序）

都市（中央）と農村（周辺）の対立構造 → 構造主義的神話研究

4. 伝統的な世界観の主要な類型の一つ

三層構造世界観：天／地／地下、神（々）の英雄的行為による天地創造

混沌（カオス）と秩序（コスモス）の二項図式 → 水・海のメタファー

洪水神話

（2）二つの創造物語

5' 資料仮説（PとJ）に基づく聖書学的説明。しかし、これは思想的説明ではない。

5. プラトニズムの枠組み：フィロン、アウグスティヌス

イデアの創造と物質世界の創造

6. 第1創造物語：人間の固有性・独自性

定型句：「神はAあれと言われた。するとそのようになった。神はAを見て良しとされた」 → 創造の善性（有意味性）、「創造（言葉・行為）→存在」

「生への畏敬」（A. シュヴァイツァー）

「存在への畏敬」（H. リチャード・ニーバー）

7. 第一創造物語の現代的意義：「老い」「弱さ」の意味、神による存在の肯定

8. 被造物としての世界→世界の善性＝合理性

9. 人間存在の意味：神の像（*imago Dei*） → 特殊な使命（支配？）・人間の固有性

「ある」ということの意味、老いの意味、人間の価値は存在か、行為・能力か

↓

自らに与えられた理性（合理性）によって世界の合理性を解明する人間

神の像は、理性でよいのか？

東方神学の伝統：関係性（社会性）としての神の像、

「我々にかたどり、我々に似せて」（1.26）

バルト、モルトマン

10. 第2創造物語：関係存在としての人間 → 知恵・耕す（科学技術）

パートナーとの関わりにおける人間（人間の社会性）

他の生命体との同質性・連帯性

（3）エコ・フェミニズムと創造論

11. 聖書の創造物語は、人間中心主義、あるいは男性中心主義か？

リン・ホワイトの批判的問題提起（『機械と神』みすず書房）と論争・集中的研究

12. 自然との関わりにおける人間理解の二つのモデル。人間中心主義的な読解は根拠がない。

モデルという思考方法の意義：モデルは複数の相補的である。文脈における適切性を問うべきである。

芦名定道『自然神学再考』晃洋書房。

13. カオスの脅威と創造の反復→創世記1章（創造神話）と6章（ノアの物語）との構造的類似性

洪水神話の世界的な広範な広がり

カオスの脅威は継続する。神々の英雄的行為は、宗教的儀礼（祭り）における人間によって反復される（＝コスモスの更新）。

14. 「肋骨は連帯と平等を意味している」（P. トリプル「イヴとアダム——創世記2-3章再読」）

15. エコ・フェミニズム的アプローチの意義：金4の大学院演習

「エコフェミニズムは、古典的なキリスト教神学と、家父長的な世界観によって形成されたすべての古典的宗教とに対する徹底した挑戦であるが、この論文では、古代の中近東とギリシャローマ世界の世界観に根差したキリスト教に焦点が絞られる。

エコフェミニズムは女性への支配と自然への支配の相互連関を吟味し、それから解放を目指しているが、性差別と環境的搾取の間に見られるこの関係性には、文化—象徴的レベルと社会経済的レベルの二つのレベルが存在している。前者は後者を反映し承認するイデオロギー的な上部構造と考えられる。つまり、後者は、事物の自然本性あるいは神（神々）の意志との関連で正当化される。女性、奴隷、動物、土地への男性の支配関係は財産・所有として法的に指定され、この法は神（神々）によって与えられるという連関である。」

「・ヘブライ的物語

神の像におけるすべての人間の平等という見方の基礎となり得るであったが、後のキリスト教はこの方向性を取らなかった。

創世記の2～3章は、最近のフェミニスト的な弁護にもかかわらず、男性が規範的な人間であり、女性は派生的。

（これは、リューサーの読み方であり、リューサーも指摘するように、別のフェミニスト的な読み方も可能）

・ヘブライ的希望：元来は、パラダイスが回復される未来の時、地上的であり、可死性に拘束されている。

↓

ペルシャ的終末論（ゾロアスター教）の影響、黙示的終末論。

・初期のキリスト教的運動の中には、あらゆる支配的關係からのキリスト教における解放を示唆するものが見られる。パウロのガラテヤの信徒への手紙3：28。原初の平等性。

しかし、家父長的な家族と政治秩序への制度化において、この徹底的な平等性は急速に抑圧されることになった。パウロ以降の動向。

（原初の平等性とその喪失という議論は、リューサーのフェミニスト神学にとって決定的な重要性を有する。キリスト教は本来性差別を超えた平等性を有していたからこそ、歴史の長期にわたる歪曲にもかかわらず、その本来性を回復する仕方での伝統の再解釈・再構築が可能である、との議論。）

<関連テキスト>

1. 創世記1章

1 初めに、神は天地を創造された。2 地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。3 神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。

4 神は光を見て、良しとされた。

27 神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。28 神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚。空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

2. 創世記2章

7 主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。8 主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。

15 主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた。16 主なる神は人に命じて言われた。「園のすべての木から取って食べなさい。

17 ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」18 主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」19 主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。20 人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けたが、自分に合う助ける者は見つけることができなかった。21 主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。22 そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、23 人は言った。「ついに、これこそ／わたしの骨の骨／わたしの肉の肉。これをこそ、女（イシャー）と呼ぼう／まさに、男（イシュ）から取られたものだから。」24 こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。

25 人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりはしなかった。

<参考文献>

1. M.ノート 『イスラエル史』日本基督教団出版局。
2. 関根正雄 『古代イスラエルの思想家』講談社学術文庫。
3. 関根清三 『旧約聖書の思想 24の断章』岩波書店。
『旧約聖書と哲学 現代の問いの中の一神教』岩波書店。
4. ジャン・ボテロ 『最古の宗教 古代メソポタミア』法政大学出版局。
5. 月本昭男『古代メソポタミアの神話と儀礼』岩波書店。
月本昭男訳『ギルガメシュ叙事詩』岩波書店。
6. M=L・フォン・ファノン 『世界創造の神話』人文書院。
7. 阿部年晴 『アフリカの創世神話』紀伊國屋新書。
8. 君島久子編『東アジアの創世神話』弘文堂。
9. 大林太良編『世界の神話——万物の起源を読む』NHKブックス。
10. 中山 茂 『西洋占星術』講談社現代新書。
11. 田川建三「新約聖書の翻訳」『書物としての新約聖書』勁草書房。
New Revised Standard Version, 1989.
12. J. パスモア『自然に対する人間の責任』岩波書店。
13. ゲルハルト・リートケ『生態学的破局とキリスト教』新教出版社。
14. モルトマン『創造における神』新教出版社。
15. キャロル・クライスト、ジュディス・プラスカウ『女性解放とキリスト教』新教出版社。